

《論文》

## 記憶説に基づく人格の同一性の再検討

田野 倉 知 士

〈要約〉本論は、人格の同一性の記憶説で言及されてこなかった点についてジョン・ロックの論考を基に考察し、記憶説の新たな側面を捉えようとする試みである。ロックの物体、生命体、人間と人格について概観した後、特に人格の同一性を確認し、記憶による人格の同一性について着目した。そこで記憶説の問題点を検討するなかで、「勇敢な将校」の事例を基にシューメーカー、パーフィットの解釈及び反論に注目した。さらに記憶の分類を医学的視点から整理し、特に know-how の記憶（手続き記憶）が人格の同一性の議論に含まれるべきであるという主張のもと、記憶説における人格の同一性の新たな可能性を提案している。

### 序

本論では人格の同一性について考察するが、特に念頭においている人格の同一性については、時間が経過してもそれぞれの経過時点で人格が同一であることは、どうして成り立ち、そうたらしめているものは何かという点である。人格の同一性の問題を初めて大きく取り上げた書物として、ジョン・ロックの『人間知性論』<sup>1)</sup>が知られている。ジョン・ロックが『人間知性論』で議論を開始したのは、18世紀の人格の同一性に関する議論を行った人物としてデイヴィット・ヒューム、トーマス・リード、サムエル・クラーク、アンソニー・コリンズらがいる<sup>2)</sup>。これらの哲学者の中で人格の同一性に関する議論が行われていた。その後、20世紀以降再び活発化する。論者の名を挙げると、H.P. グライス、アンソニー・フリュー、アンソニー・クイントン、デレク・パーフィット、バーナード・ウィリアムズ、シドニー・シューメーカー、リチャード・スウィンバーンらである。

このように18世紀以降人格の同一性の問題は西洋哲学史の中において、哲学的なテーマとして知られてきた。本論では現代まで続く人格の同一性の議論の端緒となったロックの『人間知性論』を中心に、人格の同一性を検討してゆきたい。人格の同一性の議論を初めて西洋哲学史の中で定式化したといわれるジョン・ロックの議論を整理することで、現代でも活発に検討されている人格の同一性について新たな側面を考察したい。

本論の構成は、1章ではロックがどのように人格の同一性と人格に関連した概念をとらえていたのか、『人間知性論』を対象としてみてゆく。

2章ではロックの記憶説が発表されたのち、他の論者によってどのような問題点がロックの記憶

説に対して指摘されたか概観したい。本論で概観する問題は、循環の問題、人称の問題、パズルケースの問題、そして勇敢な将校の事例である。

3章ではシューメーカーとパーフィットの見解にはある種の前提を受け入れたまま議論を行っているゆえに、取りこぼしたように筆者に思えるものを指摘し、人格の同一性に関する議論のあらたな方向性を若干なりとも指し示す。

人格の同一性の議論に関して“person”をどのように訳すか、検討の余地があり「人間」、「人物」、「人」などの可能性がある。例えば小山によると<sup>3)</sup>、『personal Identity』は、ふつう『人格の同一性』と訳される。だが、『人格』ということばはパーソナリティを表す心理学の用語として広まっているので、誤解されないように、『人の同一性』と訳すことにする。」とあり、“person”を人と訳すべきであるという論者もある。しかしながら、本論では、“person”を人格と訳すことにしたい。

## 1 章 ジョン・ロックにおける人格の同一性について

### 1 節 ジョン・ロックにおける物質、生命体、人間について

ロックは、人格の同一性を論じる上で同一性に関して物体の同一性と生命の同一性を区別すべく以下のよう論じた。まずは物体 (a body) と物体のかたまり (a mass of body) の違いについて見てみたい<sup>4)</sup>。

たとえば一つの原子すなわち一つの変わらない面に覆われた連続的物体が、ある確定された時間と場所に存在すると考えてみよう。この原子をその存在のどの時間で考察しても、その時間には明白に原子は原子自身と同じである。なぜなら、その時間にはそのところのものであって、他のどんなものでもないから、原子は同じであり、その存在が続かなければならない。というのも、そのかぎり原子は同じで、他のものでもないだろう。同様に、二つまたはそれ以上の原子が連結して同じかたまりであっても、前の規則によってそれぞれの原子は同じだろう。そしてそれらの原子が合一して存在する間は、同じ原子から成るかたまりは、どんなに部分がさまざまに寄せ集められたにしても、同じかたまりであるに違いない。けれども、もし原子が一つ取り去られ、あるいは新しい原子が一つ足されるとすれば、もはや同じかたまり、すなわち同じ物体ではないのである。<sup>5)</sup>

ロックによると、物体と物体のかたまりの区別をし、「もし原子が一つ取り去られ、あるいは新しい原子が一つ足されるとすれば、もはや同じかたまり、すなわち同じ物体ではない」とした。続いてロックは、物体の同一性と生命の同一性の区別を続けて行う。

生きている被造物の状態では、その同一性は同じ粒子のかたまりという点に基づくわけではなく、他のあることがらに基づく。それというのは、生きている被造物では、これを構成する物質の大きな片の変動も同一性には変化しない。たとえば、苗木から大木に成長し、それから

枝を切りおろされたオークは、いつも同じオークであるし、子馬が馬に成長し時には太り、時には痩せても、その間はずっと同じ馬である。しかしどちらの場合も部分の明白な変化があるだろう。それゆえ本当はどちらも物質の同じかたまりでない。とはいえ、一つは本当に同じオークであり、他方は同じ馬である。その理由は、物質のかたまりと生命体との二つの場合では、同じものに当てはめられないのである。<sup>6)</sup>

ロックは物質と生命体との間で同一という際に、物質と生命体とでは、ある特定のものを指し示して同じ時があるものの、しかしながら、その理由は物体と生命体では、同一性の適用されるものが違っているとした。ではどのように物質と生命体とでは違うのだろうか。次節を確認する。

そこで、一本のオークの木が物質のあるかたまりとどこ違うかを考察しなければならない。この違いは次の点にあると、私には思われる。すなわち、物質のかたまりはなんらかの仕方であわされた物質粒子の集まりにすぎないが、オークは物質粒子がオークの諸部分を組織するように配置され、それらの諸部分は養分を摂取し配分して、オークの木の質や樹皮や葉などを継続し形成するに適当な体制をなしており、ここに草木の生命はある。そうすると一つの共通な生命にあるかぎり同じ植物であり続け、たとえその生命が新しい物質粒子へ、つまり生きた植物へ生命があるように合わされる新しい物質粒子へ、この種の植物に合致した連続的な体制のなかで伝達されようと、同じ植物であり続けるのである。<sup>7)</sup>

ロックによると「物質のかたまりは何らかの仕方であわされた物質粒子の集まりにすぎない」がオークのような単なる物質とは異なったあり方をしている生命体は、「物質粒子がオークの諸部分を組織するように配置され、それらの諸部分は養分を摂取し配分して、オークの木質や樹皮や葉などを継続し形成するに適当な体制をなして」いるとした。よって、植物を構成している物質粒子が新たに入れ替わったとしても、それは同じ生命体を維持するという観点から同じであり続けるとしている。

ここまで物質と物質のかたまりの違い、物質の同一性の違いと生命体の同一性の違いを見てきた。次に人間 (man) とオークといった生命体とどう違うのか見てみたい。ロックは、オークといった生命体と人間の同一性を同様のようなものに見なしている。

これで同じ人間の同一性がどこにあるのかも明示される。すなわち、絶えずかわってゆく物質粒子が同じ体制の身体へ継続して生命あるように合わさり、これによって同じ連続的生命を共にする、そうした点にだけあるのだ。<sup>8)</sup>

以上から、ロックはオークといった生命体と人間も絶えず移り変わり、入れ替わっていく物質粒子をもちつつその生命体の体制を維持していると理解していることがわかる<sup>9)</sup>。

## 2節 ジョン・ロックにおける人格について

本節では、人格 (person) についてロックがどのようにとらえていたのか見てゆきたい。以下に引用するのは、ロックが人格をどのようにとらえていたか知る際に、おそらく最もよく引用される部分である。

私の考えるところでは、人格とは思考する知的存在者であって、それは理性と反省の能力をもつ。すなわち、自分が自分であるということを考えることができる。そして、それは、時と場所とが異なっても依然として同じ思考をするものである。そして、人格がこのようなものであるのは、思考と分離不可能であり、私が思うには思考に本質的な意識によってのみである。それというのも、だれでも自分が知覚しているということを知覚することなしに、知覚することはできない。われわれは、何かを見たり、聞いたり、嗅いだり、味わったり、触ったり、思索したり意志したりするとき、自分がそうしているということを知っている。このように思考は、つねにわれわれの現在の感覚や知覚に関係する。そして、このことによって、誰もが自分自身にとって自分が自己と呼ぶものになる。この場合、同じ自己の存続が同じ実体のうちのことか、異なる複数の実体にまたがってのことかは考慮されない。というのも、意識はつねに思考にともなうものであって、この意識が各人がその人を自己と呼ぶものにさせ、各人はこのことによって自分を他のすべての思考するものから区別するのである。したがって、この意識にこそ人格の同一性、つまり、理性的存在者が同じであることが存する。また、この意識が過去の行為や意識にさかのぼって及ぼされるかぎり、その時点まで等の人格の同一性は達するのである。このとき、いまある自己はその時点での自己と同じ自己であり、その行為がなされたのは、いま当の行為について反省しているこの現在の自己と同じ自己によってなのである。<sup>10)</sup>

ロックは、何らかの判断をしたり、知覚できる能力のことを理性とし、さらにある過去の時点でなんらかの行動した自分と、現在の自分とを比較し反省できる能力を反省能力としてとらえていたことがわかる。

2巻27章6節で述べられている人間 (man) と人格 (person) の違いを確認しておくと、身体をもち生命体あるいは生物体としての存在を人間とし、それに対して意識を持ちつつ「思考する知的存在者であって、それは理性と反省の能力をもつ」人物を人格としてロックは定義している。つまり、ロックによるとある組織を形成している部分が少しずつでも入れ替わり、新しい粒子によってその組織を形成しているにもかかわらず、同一と見なされるのは動植物と人間の場合、基本的には同様であった。しかしながら、時間の流れに沿って人間と人格とを考えた場合、事態は動植物の場合とは異なっており、昨日や今日と同じと考えられる人物こそ人格として、動植物と一線を画した。そして、この人格の同一性の根拠としては、過去に自分が行った行為を自分のものとしてわかる者ということであると考えられた。

ではなぜロックは人を人間と人格として二様にとらえたのだろうか。理由の一つとしてロックは人格に対し、人が罪を犯した際にその責任を問うことのできる主体としての人格を想定していたからだと考えられる。

賞罰の正しさ、および正当性はまったくこの人格の同一性のうちにある。<sup>11)</sup>

この人格が自分の自己を現在の存在を越えて過去のものへと及ぼすのは、ただ意識によってのみである。この意識によって、人格は現在の行為の場合とまさに同じ根拠に基づいて、そして同じ理由で、過去の行為を気づかいこれに責任をもつようになり、そしてそれを自分のしたこととして自分の自己に帰するのである。<sup>12)</sup>

以上から、ロックの人格の同一性を巡る考察の背景には、ある人がある行為を行いそれによって法を犯す事態になったとしても、人格がその責任を負わなければならないという彼の主張が存在していた事がわかる。

### 3 節 ジョン・ロックにおける人格と実体との関係

ロックは実体とは、いわば「想定」の産物としてとらえていた。この点を確認したい。

心にはすでに言明しておいたように、外の事物に見出されるままに感覚が伝える単純観念や、心自身の作用について内省の伝える単純概念がたくさん備えつけられるが、心は、これらの単純観念の一定数が絶えず一緒にくることがも気づく。そしてこれらの単純観念は一つの事物に属すると推定され、また言葉が共通の理解に都合がよいようにそろえられて、手早く処理するように使われるので、それでこれらの単純観念は一つの主体へと統合され、一つの名前で呼ばれる。これをわれわれは後になると不注意にも一つの単純観念として語ったり、考えたりしがちになるが、本当は多くの観念の複合しあったものである。それというものの、すでに述べたように、われわれはいかにしてこれらの単純観念がそれ自身によって存立できるかについては考えないで、これらの観念の存立する基となり、またこれらの観念を生じる基となる何らかの基体 (substratum) を想定するように習慣づけられ、それゆえにわれわれはこれを実体と呼ぶからである。<sup>13)</sup>

ロックは実体の観念の形成を以上のように説明した。すなわち経験した多くの単純観念は、繰り返し一定のまとまりを伴ってわれわれに迫ってくる。そこで、この単純観念はある一定のまとまりによって理解され、一つの主体へと統合される。さらに、われわれは習慣によってこの繰り返し生じた観念を実体と想定するようになったとロックは主張した<sup>14)</sup>。

またロックは人格の同一性を論じる際、特に人格と実体の区別をするよう注意を促している。ロックは人格の同一性の議論に際してあらかじめ反論されるであろう点を考慮しつつ議論を行う。

私たちが過去のすべての行為の系列全体を目の前に一目で見る瞬間は生涯に一度もなく、最良の記憶さえある部分を見ている間は他の部分を見失うし、また私たちは時折、そしてそれは生涯の最大の部分だが、現在の思惟に専心して過去の行為を省察しないし、熟睡中全く思惟せ

ず、すくなくとも目覚めているときの思惟を再認する意識を伴っては少しも思惟できないので、上にいった意識はいつも忘却ということで中断される。重ねて言うと、上の全ての場合に私たちの意識は中断され、私たちは過去の自分を見失う。したがって、私たちは同じ思考する事物すなわち同じ実体であるかないかという疑惑が起こるのである。この疑惑は、どれほど道理に合うにせよ、人格の同一性とすこしもかわりがない。というのは、ここでの疑問は同じ人格をつくるのは何かであって、同じ人物でいつも思考するものは同じ同一の実体であるかどうかということではないからである。<sup>15)</sup>

私たちはほとんど例外なく、ある瞬間に過去の記憶を一度に思い出したりできないし、睡眠をとっている最中なども、意識が中断して意識の連続がないように見えるかもしれない。そうして意識が中断することによって、意識の連続がとぎれ同じ意識によって人格が成立していると考えているロックの説に問題が起こるのではないかという可能性が考えられるが、ロックによるとこうした一度に過去の記憶を思い出せなかったり、睡眠によって意識が中断しうる事態は、人格の同一性に関して問題にならないとした。すなわち実体の同一性の場合には、睡眠といった意識の中断は問題にされるかもしれないものの、人格の同一性の議論に関しては、こういった点は問題でないとした。さらにロックは以下のように続ける。

違う実体が同じ意識によって人格に合一されることは、違う身体が同じ生命によって一つの動物に合一され、その同一性が実体の変化のなかで一つの連続した生命の単一性によって保たれるのと、同じなのである。なぜなら、ある人間をその人自身にとってその人自身とさせるものは同じ意識だから、人格の同一性はこの意識だけにもとづいて、意識が一つの個の実体にだけ結びつけられているか、あるいは、いくつかの実体の継起のうちに連続できるかはどうでもよいのである。<sup>16)</sup>

以上のロックの主張から、一つの意識がいくつかの実体の継起に連続していることも許容していることがわかる。

#### 4 節 ロックにおける記憶説の主張

ロックは、身体の同一性によって人格の同一性は保証されるという考えに対しても、次の「王侯と靴直し職人」の例によって示されているような明確な意義を申し立てているように思われる。

ある王侯の靈魂がその王侯の過去の生活の意識を伴いながら、靴直し職人の身体に靴直し職人自身の靈魂が去るやいなや入りこみ、宿ったとしよう。だれしも、この男は王侯と同じで王侯の行為だけに責任をもつと、そうみるだろう。<sup>17)</sup>

ここでロックは王侯の靈魂が王侯の記憶をもちつつ、靴直し職人の身体に靴直し職人の本来あった記憶をもつ靈魂が去ったあとに、それが入ってしまうケースを考えている。そこにおいてロック

は、この場合王侯の記憶をもった靈魂が靴直し職人に移された際、王侯と同じ人格 (person) であるが、同じ人間 (man) であるとはいえないと考えている。すなわち外見上は、もとの靴直し職人であったものの記憶を伴った靈魂は、王侯であるというケースだ。この場合やはり、ロックによると王侯の記憶を持ったまま靴直し職人の身体に入ったそれは、王侯の人格であると考えている。その根拠としている点は、ロックのいうところの人格の定義である。すなわち「人格とは思考する知的存在者であって、それは理性と反省の能力をもつ。すなわち、自分が自分であるということを考えることができる。そして、それは、時と場所とが異なっても依然として同じ思考をするものである。」(2.27.9) それ故靴直し職人の身体に入った王の靈魂は、王の人格を持つというのである。

## 2章 ジョン・ロックにおける記憶説の問題点

発表当初からロックによる記憶の連続説に対して、バトラー主教とトーマス・リードによって異議が申し立てられた。バトラー主教とトーマス・リードによると人格の同一性とは、船や木といった物質とは異なったあり方をしているとした。すなわち人格の同一性にかかわるものは、「厳密で哲学的な意味」(strict and philosophical sense) での同一性であって、船や木に属するような意味での同一性ではないのだ。そして、船や木に属する同一性を「大ざっぱで通俗的な意味」(loose and popular sense) であるとした。彼らによると、人格の同一性は「定義不可能」あるいは、「分析不可能」であるのだ。

つまり、船や木といったものは、外見上それらが観察によって、時を越えての同一性を観察できるものの、人格の同一性は、「厳密で哲学的な意味」が必要であり、そもそもそういったものを満たすことに困難さを伴うために「定義不可能」としたのである<sup>18)</sup>。

他にもロックの記憶説に対していくつかの批判が提出されてきた。特にロックの記憶説への反論に関する研究史においてその論点を整理した研究者としてはフリューが知られている<sup>19)</sup>。それら先行研究に基づきながら、次節以降どのようなものが、ロックの人格の同一性の反論として現在に至るまで検討すべきものと考えられてきたか概観したい<sup>20)</sup>。

### 1 節 ジョン・ロックの人格の同一性に対する反論

ロックの記憶説に関する議論で、「循環論」という視点からの反論で特に知られている反論はジョセフ・バトラーからの反論である<sup>21)</sup>。バトラーは、以下の反論を述べた。

過去の事柄についての意識は、われわれの人格同一性をわれわれ自身に対して確かなものにするけれども、しかしながら、意識が人格の同一性をつくる、あるいは意識はわれわれが同じ人格であるために必要である、と述べることは、人格は思い出すことのできる以外には一瞬たりとも存在しなかったし一つの行為さえもなさなかった、と述べることになってしまう。そして、次のことは明白なことであると実際考えるべきである。すなわち人格の同一性の意識は人格の同一性を前提する。よって、知識は真理を前提するが故に、いずれにせよ真理を構成する

ことができないのと全く同じように、人格の同一性の意識は、人格の同一性を構成することができない。<sup>22)</sup>

すなわち人格の同一性が意識にあるという際には、人格の同一性の意識が既に含有されており、そこには人格の同一性が既に前提されている議論である。

次にロックの記憶説に対して批判される点は、人称の問題である。ロックの『人間知性論』の中でさえ、一人称基準と三人称基準が混在しているという指摘だ。人称の問題に関する議論については、一ノ瀬が以下のように指摘している<sup>23)</sup>。ロックによると人格とは、「思考する知的存在者であって、それは理性と反省の能力をもつ。すなわち、自分が自分であるということを考えることができる。そして、それは、時と場所とが異なっても依然として同じ思考をするものである。」(2.27.9) ものだった。しかしながら、別の箇所では「人格とは、行為とその功罪に充当する法廷用語 (a Forensic Term) である。したがって人格は、法および不幸の可能な知能ある行動者だけに属する。」(2.27.26) としている。この二つの人格に関する言及から考えられる不自然な点は、前者の引用からだに人格は、理性と反省能力をもちつつ自らのことを自らと考えられる知的存在者であるとしていた。つまり何らかの他のものや外的な基準に依ることなしに、人格を根拠づけうるとしていたと読めるだろう。すなわち一人称以外に人格を根拠づけるものはない。対して後者の引用によると、人格を法廷用語として取り扱うというのは、人格の根拠づけとして意味が無いばかりか、法廷という外的なものが介在してくることで犯罪の実行者とされる人格と法廷によって裁かれる人格との間に基準のずれが生じる。一方では、人格とは一人称によって処理され判断されるべきものであったはずが、人格は法廷用語であるという主張によって、外的な三人称的視点が流入し人格における人称の基準が明確ではないとする点である。

次にパズルケース (puzzle case) に関してみてみたい。パズルケースの代表的なものがパーフィットの分割脳のケース、すなわち、ある人の記憶を保持したままその記憶をもちつつ、同時に二つに分岐したりするケースのことである。パーフィットによる思考実験をみてみたい。

脳の片方の半球で十分だということは実際真実である。発作か傷害のために片方の半球が活動しなくなっても生き続けている人々は少なくない。そのような人物は残った半球で、成人の言語とか、両手の動かし方とかいったことがらを再学習しなければならないかもしれない。だがこれは可能である。…ある人物がアメーバのように分裂するのである。事態を単純にするため、私は一卵性の三つ子の一人だと想定する。次のケースを考えてみよう。私の分裂 私の身体は致命傷を負った。私の二人の兄弟の脳も同様である。私の脳は分割され、それぞれの半分は成功裏に私の兄弟の身体に移植された。その結果生じた人の各人は、自分が私だと信じていて、私の生を生きたことを記憶していて、私の性格を持っていて、他のあらゆる仕方で私と心理的に継続している。また彼は私とそっくりの身体を持っている。このケースが可能になることはありそうにもない。…私の議論の目的からすると、それは重要ではない。<sup>24)</sup>

パーフィットによると、ある人物の脳をその一卵性の三つ子の残りの二人に移植した場合、現実には実現可能か否かという観点はそれほど重要ではなく、もし心理的に残りの二人に継続して続くと

いう事態はどういうことか、という点を問題にしたように思われる。ロックの議論では、このような記憶を保持したまま分裂するというケースは想定されていないため、パーフィットを初めとする現代の研究者は、パズルケースを提示した<sup>25)</sup>。

他にロックに対する反論の中で知られているのは、「勇敢な将校」<sup>26)</sup>の例といわれているものだ。これは、トーマス・リードから提出された異議である。

ある少年が、いたずら盛りの時代にある果樹園に立ち入ったとする。少年の目的は、その果樹園で果物を盗ろうとしていたのだ。そして、盗みの疑いから果樹園の所有者（管理者）によって、むち打ちの罰を受けたとしよう。その後、むち打ちの罰を受けた少年は成人して軍人として職に就いたとする。軍人として職に就いた彼は、初めての出陣の際に、戦場での闘いの場で幸運にも敵方の軍旗を奪ったという栄誉があったとしよう。その後さらに時代が流れ、初めての出陣の際に敵方の軍旗を奪った青年が晩年には、出世をして将軍になったとする。

そして十分に起こりうることであるが、この果樹園へ盗みに入った少年は、成人して初陣の際に敵方の軍旗を奪った時点では、まだ少年時代に受けたむち打ちの罰の記憶をもっていたとする。しかしながら、晩年の将軍の時代になると、初陣の時の輝かしい記憶は留めているものの、少年時代に果樹園に立ち入って罰を受けた記憶は失われていたとしよう。

以上の事態の想定から通常考えると、少年時代に果樹園に盗みに入った人物と初陣で敵方の軍旗を奪った人物と晩年出世して将軍になった人物は、少年時代に罰を受けた記憶が晩年に無くなっている、単に物忘れとして片づけられ、少年時代に果樹園に立ち入って罰を受けた人物と青年期に軍人として功績を挙げた人物も、晩年出世をして将軍となった人物も三者は、同一人物であると考えられる。しかしながらリードによると、ロックの記憶説に基づくならば、この三者は全て同一の人物ということはできないのである。

どのようなわけで同一の人物と言えないのかというと、果樹園に盗みに入った人物と初陣で功績を挙げた人物は、少年時代に罰せられた記憶を持っているため、同一であると考えられるものの、晩年の将軍と果樹園に盗みに入った人物とを比較してみるならば、晩年の将軍は初陣の輝かしい功績のことを覚えているが、少年時代の不名誉な事柄を覚えていない。この充分にありうる想定について、ロックの記憶説に基づいて考えてみると、少年時代に果樹園に盗みに入った少年と、晩年の将軍とでは同一性が確保できないのではないのかとリードは主張した。

以上の事例は、一般に人格の同一性を論じる際に形式論理学の推移律によって表されることが多い。どのようなものかということ、少年時代に果樹園へ盗みに入って罰せられた人物を A、初めての出陣の際に敵方の軍旗を奪って功績を挙げた人物を B、老境に入って出世した将軍を C とすると、 $A=B$ 、 $B=C$ 、ならば、 $A=C$  が成り立つものの、 $A=C$  の関係については、C が A の記憶を保持していないから、成り立たないと考えられうる。

以上がロックの記憶説を批判するためにリードが想定した「勇敢な将校」の例である。

## 2 節 シューメーカーによる「勇敢な将校」の例に対する解釈と反論

以下、「勇敢な将校」の事例に対する反論の代表的な例であるシューメーカーとパーフィットの議論を概観し、これらの論者の反論としてその議論をまとめ、その後3章で、彼らの議論では取り

こぼしている点があるように思われるため、その点を筆者の意見として述べたい。

ここでは、シューメーカーによるロックの記憶説がとりうる反論をみてゆきたい<sup>27)</sup>。まず、シューメーカーは以下のように述べている。

もし記憶理論によって、ある人が過去のある行為をした人間であることの必要かつ十分条件として、その人が過去の行為を憶えているべきことが挙げられるならば、明らかにこの反論は決定的である。<sup>28)</sup>

しかしながらシューメーカーによると、ロックの立場を保持しつつ、リードの反論を回避しうる立場があるとしている。

ロックが人格の同一性に対して要求していたのは先の人間の行為をその人が思い出すことができるということであって、現に思い出しているということではないこと、そしてある考えられる状況（催眠術とか精神分析）のもとでは、リードのいう年輩の将軍は子供の頃の出来事を思い出すであろうし、それ故この意味で思い出すことが“できる”というのも当然だと思われる。<sup>29)</sup>

シューメーカーによると、意識の下にあるエピソードの記憶が、後年のある時点で呼び起こされないとしても、それは、エピソードを思い出すように問われた時点で、たまたま呼び起こされないこととした。だがシューメーカーは更に、リードが主張したかった本意とは、一時的に記憶を呼び起こせないとか、催眠術や精神分析といった手法によらなければ呼び起こせないということではないと指摘をする。

しかしながらリードの述べていることは、年輩の将軍には“鞭打たれたという意識は完全にはない”のであり、それでこの“完全に”をいかなる形で思い出すこともできない程記憶が失われていることを意味しているものとして捉えることも当然のことのように思われる。この解釈の下では、まだかかる事例が可能であるように思われる。<sup>30)</sup>

リードの指摘したかったことは、エピソードの記憶に関しては、催眠術や精神分析でしか思い出せない記憶というものではなく「完全に」忘れてしまったということを述べたかったのではないかとシューメーカーは指摘するのである。その上でシューメーカーは、ロックによる記憶説は、成り立たないという疑惑が引き起こされるものの、ロックの記憶説を放棄しなくても修正を施せば、記憶説は保持しうるとした。

通常、この困難を克服するためになされる修正は、人間時相 (person-stage) の用語を用いて表してみるのがもっとも便利である。単純な形でロックの理論を、後の人間時相が、先の人間時相に含まれている経験等の（内からの）記憶を含んでいるとき、そしてその時に限り二つの人間時相は同じ人間に属していることを主張している理論として捉えてみよう。ここで我々

は、ある人の現在の人間時相は、たとえあることを一時的に忘れていても、その人がそれを思い出す可能性を持っている限り、そのものの記憶を含んでいと認めるべきである。このような場合その時相は、思い出す可能性の基礎となっている“記憶痕跡”を保持しているであろう。<sup>31)</sup>

「人間時相」とは、ある特定の時点に存在する限りでの人間の段階、人間の時間的部分のことである<sup>32)</sup>。さてシューメーカーによると、先の人間時相が後の人間時相の中に、内からある経験を含んでおり、そしてその人間時相が含まれている場合のみ、二つのあるいは、複数の人間時相は同じ人間のものであるとした。そしてこのことを「“記憶痕跡”を保持している」とシューメーカーは言い換えた。

つまり、リードの反論に対抗するために修正されたロックの記憶説とは、記憶した痕跡さえ同一とされる後の人間に残っていたのならば、その人間は記憶した痕跡当時の人間と後の記憶した痕跡を保持している人間との間に記憶の連続性があるとしたのである。

この説明によって、“過去の自分”との同一性にとって必要だとされるのは、人が過去の自分の行為や経験を憶えていることではなくて、その人がその過去の自分との間に“記憶の連続性”を持っていることになる。<sup>33)</sup>

以上がロックによって主張された記憶説に対する、リードの反論を回避しうる道として、シューメーカーが提示したものである<sup>34)</sup>。

### 3節 パーフィットによる「勇敢な将校」の例に対する解釈と反論

本節では、パーフィットによる「勇敢な将校」の議論の解釈と反論の可能性をみてゆきたい<sup>35)</sup>。

ロックは経験記憶が人格の同一性の基準を与えると示唆した。これはそれ自体としてはもっともらしい見解ではないが、私にはこれはもっともらしい見解の一部分でありうると考える。それゆえ私はロックの批判者たちに答えようと試みるだろう。…経験記憶という基準を、このような場合もカバーするように拡張する方法はいくつかある。私は経験記憶の重なり合った鎖という観念に訴えたい。Xが20年前のYが持った経験のいくつかを今思い出せるならば、今日のXと20年前のYとの間には直接記憶連結 (direct memory connections) があるということにしよう。ロックの見解によれば、これがXとYとを同一人物たらしめる。そのような直接記憶連結がないとしても、今のXと20年前のYとの間には記憶の連続性があるかもしれない。それは今のXとその時のYの間に、直接の記憶の重なり合った鎖が存在するときである。大部分の成人の場合、そのような重なり合った鎖が存在するだろう。この20年間毎日、これらの人々の大部分は前日の彼らの経験のうちにあるものを思い出していたのである。ロックの見解の改訂版によると、現在のある人物Xは、過去のある人物Yとの間に記憶の継続性があるならばYと同一人物である。<sup>36)</sup>

パーフィットによると、現在の X と 20 年前の Y との間には直接記憶連結があるのならば、それは問題ないとした。ロック説がこの直接連結記憶を記憶の連続性の根拠としていると、「勇敢な将校」はロックへの反論になりうるかもしれないが、しかし必ずしもそう考える必要はないとする。なぜならば、パーフィットによると現在の X と 20 年前の Y とでは、鎖のような関係で記憶同士がつながっており、現在の X と 20 年前の Y とでは、必ずなんらかのしかたで記憶が鎖のように繋がっているからである。

つまり、「勇敢な将校」の事例に立ち返って考えてみると、少年時代に果樹園へ盗みに入って罰せられた人物を A、初めての出陣の際に敵方の軍旗を奪って功績を挙げた人物を B、老境に入って出世した将軍を C とするなら、A と C の間に直接的に思い出せないとしても、A と C の間には B を介した記憶の鎖があるため、A と B が連続しているといえるというものだ。

この議論の展開は、シューメーカーがとった記憶痕跡の議論と類似しているように思われる。シューメーカー、パーフィットともに A と C の間に何らかの形でつながりが介在している可能性があるという点が共通していると考えられる。シューメーカーによると、それは記憶痕跡であり、パーフィットによると記憶の連鎖である。よって両論者の主張は、反論の方法としての戦略が類似しているといえる。

### 3章 考察

#### 1 節 記憶の議論の一面性

さて、以上「勇敢な将校」の事例についてのシューメーカーとパーフィットの議論を見てきた。そして、両論者の議論を総括すると A という記憶と C という記憶の間にはなんらかの繋がりがありそれによって、A と C とは連続しているとしていた。しかしながら、筆者の見解ではシューメーカーとパーフィットの議論では、記憶を一側面からでしか捉えられてないように思われる。というのも、記憶は「勇敢な将校」の事例にみられるようなエピソード記憶のみであたかも成立していると彼らはとらえていると思えるからである。それに対して本来記憶にはエピソードの記憶ではないような記憶もあるのではないだろうか。そしてその記憶も人格の同一性に深くかかわっているのではないだろうか。

エピソードの記憶ではないような記憶として筆者が考えている記憶とは、いわゆる know-how の記憶である<sup>37)</sup>。記憶とは、地球は丸いとか、『ハムレット』の著者はシェイクスピアである、かくかくしかじかのことを知っているというように命題的に表すことが出来る言明的なもの know-that の記憶と、自転車に乗ることができる、ピアノの演奏ができる、外国語として英語を話せるといった know-how の記憶とに分けることが可能だろう。「勇敢な将校」の例で言えば、少年時代に果樹園へ盗みに入って罰せられた記憶は、know-that の記憶にあたる。なぜならば know-that の構文で少年時代に果樹園に盗みに入ったという言明を表せることができるのに対し、know-how で表そうとしてもそれは、的はずれな表現になってしまうように思われるからだ。

さてシューメーカーとパーフィットの議論では、記憶には know-that の記憶しか存在しないこ

とが暗に想定されているように考えられる。果樹園に盗みに入ったという記憶はたしかに know-that の記憶であるが、しかしながら人の記憶は know-that のみで成立している訳ではなく know-how の記憶も必ず含まれているだろう。「勇敢な将校」の事例で考えてみると know-how の記憶である馬の操縦技術を学童期に習得したとしよう。そして、青年期を経て老年期になっても、馬の操縦技術は忘却してしまわないのではないか。このことは、現代に置き換えると自転車の運転方法やマニュアル自動車の運転方法を思い浮かべればよいかもしれない。学童期に自転車の操作方法や青年期にマニュアル自動車の運転方法をいったん修得したのであれば、老年期になったからといって know-that の記憶のように know-how の記憶が喪失することは考えにくい。

このことから明らかなように、know-how の記憶は know-that の記憶のような仕方で留まっているのではなく、一度修得したのであれば全生涯を通じて消え去らない記憶であるのだ。したがって、「勇敢な将校」の事例に反論をするのであれば、シューメーカーやパーフィットのような反論の仕方でも反論しうが、彼らの反論の仕方では記憶を一面的にしかとらえていないばかりか、記憶痕跡や鎖のような形で継続している記憶というものの説明が必ずしも明確ではない。そこで、know-how と know-that の区別を記憶説の議論に導入することで、「勇敢な将校」の事例についてはシューメーカーやパーフィット両者の説明よりもより明確に説明できるように思われる。

また know-how と know-that の区別を用いると、他にも人格の同一性の議論に新たな方向性を見いだせることができるように思われる。例えばある人が認知症<sup>38)</sup>の進行によって know-that の記憶を喪失したと仮定する。そうすると、この人がなお同一性を保っていることをシューメーカーやパーフィットの説明では必ずしも明確に説明はできないように思われる。記憶痕跡が認知症の人にも確かにあるのだろうか。もし記憶痕跡があるのだとすれば、どのように確認し取り出しうるのか等々の課題が残るし、パーフィットのように鎖のつながりのようにたどったとしても、認知症に罹患している人の場合でもそのような方法によって、どのようにたどれるのかという疑問が残る。それに対して筆者の区別を用いるのであれば、たとえ認知症によって know-that の記憶がなくなったとしても、know-how の記憶が完全に喪失するとは考えにくい。

したがって、「勇敢な将校」の事例とそれに対するシューメーカー及びパーフィットの見解に対する議論において、これらの議論は know-that という領域で行われていたが、しかし実際記憶には、know-how の領域もあり know-how 記憶の概念をこの議論で導入することで、シューメーカーやパーフィットの見過ごしていた点を明確にするだけでなく、新たな知見が得られるように考えられる。特に認知症のケースを検討した場合、それはより鮮明になる。

## 2 節 精神医学からみた記憶の分類

精神医学の見地から記憶の分類はどのように位置づけられているのだろうか。本節では特に know-that と know-how に関係する記憶の分類について触れ、考察の手がかりとしたい。

精神医学の見地から記憶とは通常3過程があると考えられている。その3過程とは、記銘 (registration)、把持 (retention)、想起 (recall ないし retrieval) である<sup>39)</sup>。記銘とは、外部からの情報が本人によって認識される状態のことである。認識されないような情報とは、記銘の段階にすら到達せず、ましてや把持や想起という段階には到達することはないとされる。把持とは記銘され

た情報を本人の内に留めておくという状態のことを指す。そして、想起とは把持によって本人の内に留めて置いた情報を再び思い起こすことである。

次に記憶時間からの分類を見たい。記憶時間からの分類は、研究者によって、あるいは精神医学や心理学という学問分野によって多少ばらつきはあるが、ここでは時間の短い順から長い順へという順序でまとめてみたい。古くは短期記憶と長期記憶の二つの区分としてジェームズが導入した<sup>40)</sup>。その後多くの研究の後に即時記憶、近似記憶、遠隔記憶、短期記憶、長期記憶に区分されることとなる<sup>41)</sup>。即時記憶とは、記銘の後に即座に思い出すことが可能な記憶である。意識の上に常に上がっていることで明確に確認できるような記憶がそれである。例えば、数字を記憶した際に即座に復唱出来るような記憶や、空間情報を記憶した際に即座に思い出すことが出来るような記憶にあたる。次に近似記憶について述べると、時間的な幅が論者によってあり明確な定義は出来ないものの、記銘してから数分から数日の幅がある記憶である。近似記憶の重要な点は、記憶を呼び起こそうとする者が何かしらかの他の認知的作業をし、そうしたなかで呼び起こされた先に記銘した記憶のことである。換言すると、一度意識から消えた後に再び思い出せるような記憶のことである。遠隔記憶とは、近似記憶と同様に明確な定義はないものの、近似記憶よりもさらに保持時間の長い数週間から数十年の幅がある記憶とされる。保持されている情報は、最初の記銘から他の認知作業の影響や時間的影響を受けるために、一度意識から消える記憶である。個人生活史的記憶や社会的な出来事の記憶だ。

実際の臨床現場においてはどのようなのだろうか。アルツハイマー型認知症では、記憶時間の分類によると近時記憶の障害がまず起きることが多く、「物の置き忘れ、ガスの火の消し忘れ、電話内容が伝えられない、買い物品の買い忘れ、昨夕のおかずを思い出せない」<sup>42)</sup>等が挙げられる。しかし、こうしたことは多くの場合認知症に罹患していない者にもしばしば起こるものの、認知症に罹患していない者の場合、何らかのヒントを与えたら思い起こすことができ、この点が認知症患者と認知症に罹患していない者の差である。更に「遠隔記憶の障害としては、職業、配偶者の名前、子どもの数、名前などが思い出せない」<sup>43)</sup>等の特徴があげられ、「社会的出来事の記憶低下に関しては、症例によってかなり異なり、その人の痴呆の程度はもちろんのこと、それまでの知識、痴呆は中期以降は記憶はもとより注意、集中も障害されるので、瞬時記憶の障害も明らかとなる。」<sup>44)</sup>

更に記憶内容による分類を見てゆく。記憶内容からみた分類は大きく2つに分かれる。陳述記憶 (declarative memory) と非陳述記憶 (non-declarative memory) である<sup>45)</sup>。そして、前者はさらにエピソード記憶 (episodic memory) と意味記憶 (semantic memory) に分けられるとされる<sup>46)</sup>。エピソード記憶とは、一般にひとりひとりの生活を通じて獲得していく記憶であり、通常日常会話で使われる「記憶」に近いと言われている<sup>47)</sup>。例えば、昨日何を食べた、昨日誰と会った、何年に学校を卒業したといったような記憶である。意味記憶とは、言語、数字、概念、記号、事実などに関係する記憶であり、いわば辞書的な説明である。通常は何回かくり返しながら覚える記憶と言えるだろう。例えば、橋は川に架かっているとか、箸は食事の時に用いるといったものだ。非陳述記憶についてみると、これも主に手続き記憶 (procedure memory) と知覚的プライミング (priming) に分けることができる。手続き記憶とは、自転車に乗る、泳ぐ、キーボードが打てるという記憶のことである。これらの記憶で、アルツハイマー型認知症においては、エピソード記憶は必ず障害され、しかもアルツハイマー型認知症発症早期からこれが認められ、また選択的に意味記憶も欠落し

てくとされている。また記憶内容の分類から見た場合、より表層的なものから深層的なものへと配列するならば、エピソード記憶、意味記憶、知覚的プライミング、手続き記憶という順序になっている。

これらの記憶内容による分類から know-that と know-how という知識分類との対応関係を考えてみると、know-that 記憶に対応するものが、陳述記憶であり、know-how 記憶に対応するのは、非陳述記憶にあたるだろう。

### 3 節 認知症患者における know-how の記憶保持の事例

以上のように know-how の記憶に対応するのが手続き記憶にあたると思われるが、本節では実際に認知症患者が know-how の記憶を有しているという事例を取り上げ、know-how の記憶がエピソード記憶と比較し強固であることがわかる事例を取り上げたい。

本節ではアルツハイマー病と診断をされているものの、自動車の運転を止めようとししない患者の例である。

69歳、男性。67歳から物忘れに気づかれている。置き忘れやしまい忘れがしばしばみられ、同じことを何回も聞くようになった。以前は好きだったゴルフをやらず友人付き合いもしなくなった。家業（農業）の関係で車の運転を頻繁に行うが方向がわからず、なれた道順で戸惑うことも多い。69歳時、「物忘れ外来」を受診し、諸検査の結果からアルツハイマー病と診断した。検査結果を説明する際、妻と息子呼んで今後車の運転を止めさせるよう伝えたが、妻は自分が運転しないので患者さんが運転しないと仕事に差し支える、困ると言って聞き入れない。息子さんは、車の運転を止めさせますと言っていたが、患者さん本人は、「車の運転はほけ防止でやっているから止めたらばけてしまう」と運転を放棄することを躊躇していた。<sup>48)</sup>

以上の事例から言えることは、患者本人は認知症に罹患しているにもかかわらず、自動車の運転をしているという点である。このようにエピソードの記憶は徐々に忘れ、少なくとも「正常」という程度のエピソード記憶保持能力がないにもかかわらず、自動車運転という know-how の記憶は保持している事態が観察できる。この事例から、認知症にかかっている場合でも know-how の記憶は強固であり、認知症に罹患したからといって直ちに無くなるようなものではないといえるだろう。

## 結語

本稿では、以下のことを論じてきた。1章では、ロックがどのようにして人格の同一性に至るまでの議論を展開してきたのか概観した。2章においては、ロックの記憶説で問題とされている部分を概観し、その問題とされている課題の一つの回答をさぐることを目的に過去に提出された議論を概観し検討した。3章では筆者の意見として、記憶説を巡ってシューメーカーやパーフィットらの議論では取りこぼしているようにみえる know-how の記憶を人格の同一性の議論に加える必要が

あると指摘し、記憶説の新たな可能性を提案した。

## 注

- 1) Locke, John (1975): *An Essay concerning Human Understanding*, (ed. by Peter H. Nidditch,) Oxford Clarendon Press.(ジョン・ロック『人間知性論(二)』(大槻春彦訳)、岩波文庫、1974年、引用は巻、章、節の番号を記す。)
- 2) Perry, John,ed.(2008): *Personal Identity*, University of California press. 人格の同一性の議論に関するアンソロジーであり、人格の同一性の議論を概観する上で欠かせない。
- 3) Cone, Earl and Sider, Theodore (2005): *Riddles of Existence*, Oxford University Press. (アール・コニー、セオドア・サイダー『形而上学レッスン』(小山虎訳) 春秋社、2009年、p.29の訳注)
- 4) 本章での議論の枠組みは、秋本ひろと「意識と意識を越えるもの——ロックの人格の同一性をめぐって——」、『論集8』、三重大学人文学部哲学思想系、教育学部哲学倫理学教室、1997年、pp.136-144 及び森下直貴「『人格』の概念の一考察 ——ロック的枠組みとパーフィットの「還元主義」——」、『浜松医科大学紀要 一般教育第8号』、1994年、pp.2-7を参照した。
- 5) Locke, John (1975): *An Essay concerning Human Understanding*, (ed. by Peter H. Nidditch,) Oxford Clarendon Press. (2.27.3)
- 6) *ibid* (2.27.3)
- 7) *ibid* (2.27.4)
- 8) *ibid* (2.27.6)
- 9) ロックによると動物と人間 (man) と同じような関係にあるととらえていたと思われる。「動物とは、体制をもつ生命体である。したがって、同じ動物とは、先に検討したように、さまざまな物質粒子がある動物というその体制ある生命体へたまたま継続的に合わされると、この物質粒子へ伝達される同じ連続的生命のことである。」(2.27.8)
- 10) Locke, John (1975): *An Essay concerning Human Understanding*, (ed. by Peter H. Nidditch,) Oxford Clarendon Press. (2.27.9)
- 11) *ibid* (2.27.18)
- 12) *ibid* (2.27.26)
- 13) *ibid* (2.23.1)
- 14) cf.「そうしてみると、私たちのもつ観念で実体という一般名の与えられるものは、存在すると見出される諸性質の想定されはするが、知られない支えにすぎず、私たちは、それら諸性質が *sine re substante* すなわち支える事物なしに存立できないと想像するので、この支えを *substantia* (実体) と呼ぶのであるが、この言葉の本当の表意にしたがうと、わかりやすい英語でいえば、*standing under* (下に立つ) とか *upholding* (上に保つ) とかいうのである。」(2.23.2)
- 15) Locke, John (1975): *An Essay concerning Human Understanding*, (ed. by Peter H. Nidditch,) Oxford Clarendon Press. (2.27.10)
- 16) *ibid* (2.27.10)
- 17) *ibid* (2.27.15)
- 18) Butler, Joseph, "Of personal Identity" in *The Analogy of Religion*, appendix, from *Personal identity*, ed. By Perry, J., University of California Press 1975.p.100.
- 19) Flew, Antony, "Locke and the Problem of Personal Identity" in *Philosophy*, Vol.26,no.96, (rpr.John Locke Critical Assessment,ed By Richard Ashcraft, Routride, 1991, pp.511-526) 訳に当たっては以下を参照した。佐々木拓「ジョン・ロックの人格の同一性論を巡る諸問題」、第53回日本倫理学会自由課題発表原稿。
- 20) 本章での議論について、石毛弓「ロックにおける人格の同一性と『人称』の問題」、『アルケー 16』、関西哲学会、2008年を参照した。

- 21) Butler, Joseph, "Of personal Identity" in *The Analogy of Religion*, appendix, from *Personal identity*, ed. By Perry, J., University of California Press 1975.p.100
- 22) *ibid.*p.100
- 23) 人称の問題の議論に関しては、一ノ瀬正樹『人格知識論の生成——ジョン・ロックの瞬間』東京大学出版会、1997年、p.156に詳しい。
- 24) Parfit, Derek (1984), *Reason and persons*, Oxford University Press.pp.254-255. (デレク・パーフィット『理由と人格』(森村進訳) 勁草書房、1998年、pp.351-352.)
- 25) パーフィットによる議論の枠組みは、小島雅春「パーフィットにおける人格の同一性」、『社会科学討究 第37巻第3号(109号)』、早稲田大学社会科学研究所、1992年、及び中才敏郎「自我とその同一性」、『科学哲学』21巻、日本科学哲学学会、1988年を参照した。
- 26) Thomas Reid, *Essay on the Intellectual Power of Man*, Essay III, CH6, *ibid.* Thomas Reid, *Philosophical Works I / II*, Georg Olms Verlag, 1983,p.351  
訳に当たっては、以下を参考にした。福田敦史「人格の同一性と『現在からの視点』」、『科学基礎論研究』、第98巻第2号、2002年。北村実「人格の同一性とは?」、遠藤弘編『フィロソフィア』、第90号、早稲田大学哲学会、2004年。
- 27) 本節におけるシューメーカーによる指摘については以下によるものである。Shoemaker, Sydney and Swinburne, Richard (1984): *Personal Identity*, Basil Blackwell. (シドニー・シューメーカー、リチャード・スウィンバーン『人格の同一性』(寺中平治訳)、産業図書、1986年。) しかしながらシューメーカーは、Shoemaker, Sydney (1963): *Self-knowledge and Self-identity*, Cornell University. (シドニー・シューメーカー『自己知と自己同一性』(管豊彦・浜渦辰二訳)、勁草書房、1989年。) において、記憶の観点から人の同一性を考えるのに、比較的否定的な主張を繰り返している。したがって、本論ではロックの記憶説の修正しうる道としてシューメーカーの主張をとりあげているものの、その意見が必ずしもシューメーカーの最終的な意見ではない。
- 28) Shoemaker, Sydney and Swinburne, Richard (1984): *Personal Identity*, Basil Blackwell. p.80. (邦訳 p.122.)
- 29) *ibid.*p.80.(邦訳 p.122.)
- 30) *ibid.*p.80.(邦訳 p.122.)
- 31) *ibid.*p.81.(邦訳 pp.122-123.)
- 32) 邦訳 p.114.
- 33) *ibid.*p.81.(邦訳、p.123.)
- 34) シューメーカーによるとこのような修正されたロックの記憶説については、グライスおよびペリーによって定式化されたとしている。*Ibid.*p.81.(邦訳、p.252.)
- 35) 本節ではパーフィットによる「勇敢な将校」の事例の反論の可能性にふれるが、パーフィットの最終的な人格の同一性に関する立場を、必ずしも本節で取り上げる議論は反映している訳ではない。どのようなことかというパーフィットは、人格の同一性についての問題は答えをもたねばならないという、人格の同一性に関する議論のある種の出発点に疑問を呈し、本論とは異なる視点から人格の同一性を論じている点からだ。本論では、パーフィットの議論の詳細に立ち入らない。
- 36) Parfit, Derek (1984), *Reason and persons*, Oxford University Press.p.205. (デレク・パーフィット (森村進訳)『理由と人格』勁草書房、1998年、p.287.)
- 37) know-how と know-that の区別に関しては、ギルバート・ライルによって導入された。Ryle, G. (1984). *The Concept of Mind*, The University of Chicago Press. pp.26-27, 28, 199, 28-32. (坂本百大、宮下治子、服部弘幸訳)『心の概念』みすず書房、1987年。)
- 38) 2005年以前は痴呆症という言葉が多く使用されていたが、2010年現在痴呆症という言葉よりも、認知症という言い方が一般的であり、本論でも慣例にしたがって引用、書名等の場合を除き、原則的に認知症という言い方を用いる。
- 39) この三分区は古典的な区分とされ、例えば浅井昌弘「脳の局在損傷と記憶」『神経心理学』、第2巻第1号、1986年がある。

- 40) James, W.(1890). *The principle of Psychology* (2vols.), Holt.
- 41) 藤井俊勝「記憶とその障害」、『高次脳機能研究』第30巻1号、pp.19-21、2010年。
- 42) 黒田重利『アルツハイマー型痴呆の臨床』新興医学出版社、1998年、p.10.
- 43) 同書、p.10.
- 44) 同書、p.10.
- 45) Squire, L. R & Zola-Morgan, S. : The neuropsychology of memory; new links between humans and experimental animals. Ann. NY. Acad. Sci.,444:137-149.1985.
- 46) Tulving, E,: Episodic and semantic memory. In :Organization of memory (eds Tulving, E. & Donaldson, W.) Academic Press, New Tork,1972,pp.381-403.
- 47) 増本康平「アルツハイマー患者の記憶障害：記憶リハビリテーションの現状と動向について」、『臨床死生学年報』第6巻、pp.89-97、2001年。
- 48) 川畑信也『事例から学ぶアルツハイマー病診療』中外医学社、2006年、p.164.